

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15H03418

研究課題名（和文）ハンセン病問題の多声的記述 「和解の時代」の研究展開

研究課題名（英文）Polyphonic Approach to Leprosy Problems: New Research for the 'Era of Reconciliation'

研究代表者

蘭 由岐子 (ARARAGI, Yukiko)

追手門学院大学・社会学部・教授

研究者番号：50268827

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、現在を、「加害-被害」の関係性をもった関与者相互の「和解」を展望する「和解の時代」ととらえ、あらたな歴史的事実の掘り起こし、資料整理、関与者の語りや文献に基づく「糾弾の歴史」とは異なる歴史の再構成を目指した。主な成果は、『国立駿河療養所自治会所蔵資料目録』の作成、近代日本のハンセン病の歴史に関するあらたな知見と記述、戦後のハンセン病療養所入所者の運動、ハンセン病をめぐる記憶の継承をめぐる検討、ハンセン病文学とそれを手がかりにした継承実践である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、1990年代よりにわかに強まったハンセン病問題に関する「糾弾の歴史」の視点に対して、病者の人権擁護の観点を共有しつつも、別様の解釈も可能であることを文書・オーラル双方の史資料をもって学際的にあきらかにするとともに、ハンセン病を患った経験をもつひとたちを単なる「被害者像」に矮小化することなく、その「生」の豊饒性を一般社会のひとびとが理解できるような成果を創出し、ハンセン病問題の継承のあり方をさぐった。

研究成果の概要（英文）：This research understands the present as an "era of reconciliation", which looks at the "reconciliation" between the stakeholders who have heretofore been cast in a "harm-damage" relationship. The aim was to uncover new historical facts, organize materials, and reconstruct a history different from the "history of denunciation" based on the narratives of the stakeholders and the literature. The main achievements are the creation of the "Catalog of the National Suruga Sanatorium Residents' Association's Documents", new knowledge, and description of the history of leprosy in modern Japan. We further clarified social movements in post-war Hansen's Disease sanatoria and their residents, the inheritance of memories of Hansen's disease, and how Hansen's disease literature serves to pass on these memories to society.

研究分野：社会学

キーワード：ハンセン病 歴史 ライフストーリー 患者運動 継承 文学 アーカイブズ

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「らい予防法」廃止前後から、とりわけ、ハンセン病国家賠償請求訴訟以降、日本のハンセン病問題は、「人権侵害の歴史／物語」として語られるようになった。たとえば、「らい予防法」廃止前夜の1993年に出版された藤野豊氏の著作(藤野1993)は、その嚆矢であった。それは1998年以降のハンセン病国家賠償請求訴訟の原告側論理に学術的根拠を与え、結果的に国からの賠償およびその後の補償を勝ち取るという実質的成果をあげてきた。そのため、その後のハンセン病問題に関する学術的研究そのものも、いわゆる「糾弾の歴史」の視点を軸足として展開されることとなった。たしかに、病者の被ってきた被害の甚大さを顧みるとき、この視点は非常に有効に機能したことはまちがいない。

しかし、いまだ全容があきらかにならなかったとはいえないハンセン病の人文・社会科学的側面について、つねに現時点からそのような視点で歴史的事実を確定してこうとすることは果たして望ましいことなのか。この素朴な疑問が本研究の出発点である。

なぜなら、本研究の代表者らは、それまでの研究過程において、上述の視点の有効性と限界性に気づいてきた。ハンセン病を生きたひとびとの語りは、被害を訴えるだけではなかったこと(蘭2004=2017)、また、「絶対隔離政策」と形容されるハンセン病政策も、その端緒をなす1907年法から1931年法、戦後の「らい予防法」(1953年)まで、政策の主題や隔離の対象をめぐるさまざまな変化を伴いながら運用されてきたこと(廣川2011)を示唆しているからである。

2. 研究の目的

本研究は、ハンセン病問題を人権問題として語ることを共有しつつも、現在を、従来のような関与者に対する「糾弾」の時代ではなく、「加害－被害」の関係性をもった関与者相互の「和解」を展望する時代、すなわち「和解の時代」ととらえるところからはじめ、さらにあらたな歴史的事実を掘り起こし、資料整理をし、関与者の語りや種々の文献から往時の状況を把握できる体制(「日付のある判断」(鶴見ほか2004))を整え、そして、学際的な視点から多くの論点を提示し、考察することを目的とした。

3. 研究の方法

代表者らは、社会学、歴史学(近代史)、文学、公衆衛生看護学を専門としている。そのため、その方法は、それぞれの分野の方法論にのっとっている。同時に、定例研究会における忌憚のない議論によって、各自のよってたつ方法論および方法、および、論点を相対化して、もっとも有効な論の展開をおこなうことを志向した。具体的な方法は、文献検討、フィールドワーク、表象分析、作品分析である。なお、文書記録・保存の方法については、歴史学における標準的な資料整理の方法にのっとった。

4. 研究成果

(1)『国立駿河療養所自治会所蔵資料目録』の作成

前期科研費研究(課題番号23330163)からの継続課題であった、国立駿河療養所自治会が所蔵する資料について、目録を作成した。文書資料は、自治会の建物の2階にある「書庫1」「書庫2」「記録室」に保管されていたものを対象とした。調査の結果、1945年の開園直後から今日にいたる約4500件の文書や図書・雑誌類が確認され、特に、「書庫2」は自治会「駿河会」の運営のため作成・保管されてきた貴重な資料が多く含まれることが明らかとなった。前期科研期間において、おおよその背表紙の撮影と自治会職員への目録作成の現況説明、および、その段階までに完成した各室ごとの目録ファイルを提供していたが、2017年夏、目録の項目を整理し、同年秋、現地にて、年代不明・簿冊名判読困難なものを現物で確認して入力した。付箋の挟み込みが完了していなかったものについても、その挟み込みを完了させた。その後、メンバーで手分けして入力したファイルを代表者がとりまとめ、印刷製本を業者に依頼し、総頁数205ページの目録が完成した。2018年11月自治会長に手渡した。

(2)近代日本のハンセン病の歴史についての研究

研究分担者の廣川和花は、近代日本のハンセン病の歴史の研究について3つの観点からの研究を展開した。第一は、研究代表者が行ってきたハンセン病患者と家族・社会との「和解」の困難さについての研究から示唆を受け、近代日本のハンセン病史を踏まえての、国賠訴訟以降の運動と「和解」の問題についての研究である。1990年代以降の近代日本のハンセン病史研究には、それ以前の「顕彰」の歴史像を「糾弾」し「検証」しようとする運動の意識が強くはたらいいたため、国賠訴訟というコンフリクト後の「和解」へのステージへの移行に困難を来していること評し、この状況に対して、現段階のハンセン病史の実証研究の成果を提示することで、あらためて議論の基盤を提供した。第二は、ハンセン病の歴史研究の基盤となる記録(歴史資料)の保存と利用に関する研究である。これは(1)の国立駿河療養所の自治会所蔵資料調査・目録作成と連動した研究である。自治会資料など当事者の手によって作成され残されてきた資料は、ハンセン病の歴史を後世に伝える第一義の歴史資料であり、廣川は、これらの資料の保存と研究利用、そして、公開への道筋をつけるため、シンポジウムや論文等でさまざまな具体的な提言を行った。また、第三は、ハンセン病医学の歴史における疫学の役割について、戦前期日本の医学者らの行った疫学調査の記録を通じて、ハンセン病療養所内部だけでなく地域社会に存在する患者の実

態をあきらかにし、またその調査を通じて患者がどのように把握され処遇されていったのかをあきらかにした。第三の研究は、研究分担者の沖繩や奄美大島のハンセン病史の研究成果にも学んでいる。

研究協力者の松岡弘之は、同じく近代日本のハンセン病の歴史を、外島保養院・光明園・邑久光明園の自治の歴史を通して精力的に描きだし、2020年1月単著として上梓した(松岡2020)。1909年に設立された大阪の外島保養院は、早くも1918年には「自治的制度」が開始された。1934年の室戸台風で壊滅したあと、生存者416名の全国6カ所の国公立療養所への委託を経て、1938年第三区連合府県立光明園として岡山県長島に再建された。この間、1941年7月に国に移管されるまで「自治」は守り継がれた。また、同著では、従来の先行研究で隔離に反対する「ファシズム闘争」として解釈されてきた国立療養所長島愛生園における「長島事件」について、「隔離の中身をめぐり抗議」として再定義した。このように療養所における自治の過程と経験を当時の資料によりながら問うことは、「糾弾の歴史」が描いたような、「近代日本のハンセン病問題を社会から置き去りにされた過去の不幸なできごと」としてではなく、「よりよい社会をともに築こうとする現代の私たちの自画像を問うこと」と地続きの課題であることをはっきりと浮かび上がらせた。

(3) 島嶼地域における療養所の構築過程にみるハンセン病問題の多様性に関する調査研究

島嶼地域に固有な現実として、ハード面(社会資本)の脆弱さをあげることができる。そのためそれを超越する営みが必要となり、法定外の事態が出来る。たとえば、宮古保養院は宮古群島区以外の病者収容は行わない、であるとか、1907年の「法律十一号癩豫防ニ関スル件」は「療養ノ途ヲ有セス且救護者ナキ者」の収容に限定されていたにもかかわらず、沖繩縣では「療養ノ途アル」者も、九州療養所への入所を規定していたという事態である。これら「例外」的な処遇の実態をヒントに、研究分担者中村文哉は、このような癩予防法関連法規と実際の患者・関係を取り巻く社会的現実の構成とのズレ・齟齬がハンセン病問題の多声性を掬い上げる理論的基盤になると考え、その考察の前提となる癩予防関連法規そのものを研究対象に据えた。中村は、研究分担者の廣川の先行研究や猪飼隆明の研究(猪飼2016)の法案分析を参考に、同関連法規がいかに地域に適用されていくか、また同関連法規がいかに法制化されたか/されなかったのかについての視点が重要であることを確認しつつも、帝国議会における議事を年代記順に追うことの限界をふまえ、制定された法を前提にしながらかそこからアブダクティブに法制化された内容を追う視点をとった。そして、癩予防関連法規とそれ以外の関連法規との関連(ネクサス)の有無を法の論理構造から探ろうとした。このような作業仮説のもと、急性伝染病および慢性「伝染」病に関わる予防法関連法規について考察した。きわめて原理的な部分に降り立った考察を重ねたため、その歴史的なものを含む背景に関する検討にまでは至らなかった。

(4) 戦後のハンセン病療養所入所者の運動に関する調査研究

研究分担者の坂田勝彦は国立療養所多磨全生園における自治会運動を中心に、第二次世界大戦後のハンセン病療養所および入所者の状況について考えた。1940年代後半以降、入所者の選挙権の回復、あらたな治療薬の登場、福祉年金等の各種社会保障制度の適用など、ハンセン病療養所と入所者を取り巻く状況は劇的に変化した。そうしたなかで、彼らがいかに状況を理解し、生活を営んできたか、患者運動の側面と、国立療養所の合理化という同時代の動向とをそれぞれ重ね合わせた形で検討した。その結果、ハンセン病療養所入所者による自治会活動が、同時代の難病政策や患者運動からさまざまな影響を受けたこと、また、その取り組みは施設管理者側や厚生省、国会議員等のアクターとの対立や協働の中で展開されてきた状況があきらかになった。そのことは、従来のハンセン病政策に関する言説においてはもっぱら対立関係でのみ理解され表象されてきた施設当局や監督官庁と患者組織との関係が、各アクターの思惑を背景に相当入り組んだものであったことを示唆している。これらの点については、個々の療養所を超えたナショナルレベルの運動を展開した全国ハンセン病患者協議会(全患協)の活動を視野に入れることで、いっそうの検討を進めていく必要がある。

(5) ハンセン病をめぐる記憶の「継承」とその実践に関する調査研究

療養所入所者の高齢化と減少により、ハンセン病当事者との直接的な出合いの機会が失われつつあるなかで、ハンセン病問題に関わる記憶と経験の「継承」が日本社会においていかなる課題となっているか、研究分担者の坂田は考察した。ハンセン病に限らず、多くの社会問題は時間の経過とともにない、社会的な関心が低減するだけでなく、その問題の理解や取り上げ方が定型化し、ある意味「陳腐化」「凡庸化」する状況が指摘される。こうした「継承」をめぐる困難および今後のあり方について、近年取り組まれている個人や市民団体の活動から検討した。また、研究代表者は瀬戸内にある島の療養所三園(長島愛生園、邑久光明園、大島青松園)がユネスコの世界歴史遺産登録をめざす状況に、かつて「隔離の島」と呼ばれていた島のあらたな側面を見出した。

また、研究分担者の西尾雄志は、若者のボランティア活動を通じたハンセン病問題へのアプローチについて研究を重ね、経験学習理論の体系にハンセン病問題を位置づけようとした。西尾のボランティア学習における理論の研究は、ハンセン病をめぐる記憶の「継承」の具体的方法を創出するために必要な理論的指針を構築するものである。しかも、西尾は、中国におけるハンセン

病定着村での具体的なボランティア活動に大学生ら取り組んできた経験をもつ。したがって、その理論は、手堅い実践に裏付けされたものであるといえよう。

(6) 旧優生保護法下でおこなわれてきた病者・障害者への強制不妊手術の問題に関する研究

ハンセン病者は、戦前は非合法的に、戦後は旧優生保護法（1948～1996）のもと、合法的に強制不妊手術を受けさせられてきた。2018年、同法で行われた不妊手術が人権侵害であると認識され、被害者らによって国家賠償請求訴訟が提訴され、少しずつ被害の実態が解明されつつあるが、研究分担者の荒井裕樹は、この強制不妊手術の問題をハンセン病者に限定せず、より広く病者・障害者の経験のなかにさぐった。荒井は、彼らの「言葉」を集め、「強制不妊手術という過酷な人権侵害に対し、病者・障害者たちはどのように抗ってきたのか」について調査・検討を進めた。具体的には、同法への反対運動が盛り上がった1970年代に、反対運動を牽引してきた病者・障害者団体の活動の歴史と、その今日的意義について考えてきた。とくに、戦前から不妊手術が行われてきたハンセン病者たちの事例と、同法に最も強硬に反対してきた脳性麻痺者や女性たちの運動の違いについて考えた。そして、ハンセン病者以外の病者・障害者たちの言葉のなかにハンセン病者の強制不妊手術に関するものがなかったことをあきらかにした。

(7) ライフストーリー・インタビューの語りからさぐる戦後沖縄ハンセン病政策史

山田は、宮古南静園退所者のライフストーリーからいわゆる「宮古方式」の意義を問い直した。「宮古方式」とは、沖縄県宮古島で採用されたハンセン病政策を指す。それは、無料皮膚科相談所スキンクリニック（一般の皮膚病も扱う）のケースワーカーが在宅患者の治療勧奨と家族の検診勧奨、回復者のフォローアップ、新患発見と検診・入所勧奨をおこなうものであった。当時の沖縄のハンセン病政策を牽引した沖縄愛楽園園長の犀川一夫が目指した保健所を基本としたハンセン病の公衆衛生施策へのインテグレーション政策とは異なるものであったが、ケースワーカーとして働いた退所者のライフストーリーを交えた語りの詳細から、「宮古方式」が、いまだにハンセン病へのスティグマの強い島の状況を踏まえたものであったこと、患者の心情に配慮しながらハンセン病のスティグマ性をコミュニティから取り除く試みであったこと、そして、当事者性を取り入れた実践であったことがあきらかにされた。それはなによりも「宮古方式」の意義でもあった。

また、研究代表者は、1950年代初頭に療養所に勤務した医師のライフストーリーを聞き取った。旧満州生まれのその医師の療養所勤務は2年にも満たなかったが、時期的に医師になったばかりの頃のことで、ハンセン病患者の整形手術の補助ができたこと、米国出身の医療者との交わりなど、その後の長い医師生活の起点となったこと、そして、「人生を勉強した」ところであったことが青木恵哉の思い出とともに述べられた。また医師は、米国から来た医療者は素手で患者に触れているにもかかわらず、療養所での防護服の着用などの規則があり、それがハンセン病への不安を募らせたと言った。短期的ではあるがハンセン病療養所で入所者の人生にかかわった医師の、ハンセン病、病者と療養所についての語り方の一例があきらかとなった。

また、ハンセン病者研究によってライフストーリー論にあらたな展開をもたらした研究代表者らは、ライフストーリー法による研究書について書評を執筆し、方法論的な議論に貢献した。

(8) ハンセン病療養所の文芸活動および文学を手がかりにした「継承」実践

研究分担者の田中キャサリンと研究協力者の佐藤健太、西村峰龍がこの領域の研究をになった。田中は、北條民雄の子ども向けの作品について、近年、国立ハンセン病資料館によって絵本化された作品について初版との比較から新たな意味がどのように追加されてきたのかについて論じた。また、日本の植民地であった台湾の療養所の文芸雑誌『萬壽果（ばばいや）』を中心にハンセン病療養所入所者たちの文芸活動によるコミュニティ、集合的記憶、および、帝国内患者共同体の生成、そして、「日本人」というアイデンティティの構築をあきらかにした。また、ジェンダーの視点から幸田露伴の『対轆轤』を読み解くと同時に、内務省編の『癩患者の告白』のある女性の記述に焦点をあててその個人誌の再構成をはかった。研究代表者が監修した古林海月のマンガ『麦ばあ島』を田中は女性・生殖・家族の視点から読み解き、このマンガの教育効果についても論じた。

佐藤は、駿河療養所や東京においてハンセン病文学読書会を主宰し、病者の作品を一般有志および療養所入所者とともに鑑賞・読解するとともに、ブックガイド（佐藤 2016）を編集した。ブックガイドの執筆には本研究会の他のメンバーも関わっている。また、公立図書館でのハンセン病文学展を企画した（豊島区立中央図書館「ハンセン病と文学展」2016）。佐藤のこれらの試みは、社会のひとびとへのハンセン病問題の紹介、関心喚起、そして、「糾弾の歴史」の視点とはことなるハンセン病問題の啓発実践ともなっている。

西村は、ハンセン病文学にかかわってきた川端康成や阿部知二らの活動や作品分析を行った。また2019年に生誕120年を迎えた川端康成を記念した文学展（於：茨木市立川端康成文学館）にあわせて解説文を執筆した（『毎日新聞』2019年7月19日付）。

(9) ハンセン病問題に関する公衆衛生看護学からの考察

研究分担者の井上清美は公衆衛生看護学の専門であり、かつ、保健師として行政での長年の実績を持つ研究者である。彼女は、自身の先輩にあたる保健師が語るハンセン病患者に対する療養

所収容過程の話聞き取った。しかし、行政官として現実に患者収容に関わったことのある保健師には出会えず、時間の限界を突きつけられた。奄美大島出身の看護師には、奄美地方でのハンセン病者のおかれた状況について聞き取ることができた。また、看護基礎教育に使用されている教科書 50 冊を精査し、そのなかでハンセン病がどのように記述されているかを考察し、歴史、法律、医学、人権、感染予防の各点から書かれていることをあきらかにした。

【参考文献】

藤野豊 1993 『日本ファシズムと医療』岩波書店。

猪飼隆明 2016 『近代日本におけるハンセン病政策の成立と病者たち』校倉書房。

鶴見俊輔、上野千鶴子、小熊英二 2004 『戦争が遺したもの』新曜社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計30件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 西尾雄志	4. 巻 19
2. 論文標題 ボランティア学習と経験学習理論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本ボランティア学習研究	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 廣川和花	4. 巻 23(1)
2. 論文標題 日本の医療アーカイブズとハンセン病関係資料の研究利用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神医学史研究	6. 最初と最後の頁 18-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中村文哉	4. 巻 33
2. 論文標題 愛楽園開園以前の沖縄ハンセン病患者たちの現実と青木恵哉 癩豫防関連地方制度下の沖縄ハンセン病者の療養生活の多様性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 解放社会学研究	6. 最初と最後の頁 71-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 HIROKAWA, Waka	4. 巻 10
2. 論文標題 The Struggle to Modernize Community Medicine in Late Nineteenth-Century Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Urban Scope	6. 最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡弘之	4. 巻 232
2. 論文標題 書評 猪飼隆明著『近代日本におけるハンセン病政策の成立と病者たち』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 部落問題研究	6. 最初と最後の頁 79-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TANAKA, Kathryn M.	4. 巻 39(1)
2. 論文標題 The abject woman and the meaning illness in Koda Rohan's 'Tai dokuro'(Encounter with skull)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Japanese Studies	6. 最初と最後の頁 57-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 蘭由岐子	4. 巻 193
2. 論文標題 書評 三浦耕吉郎著『エッジを歩く』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 185-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西尾雄志	4. 巻 19
2. 論文標題 ボランティア学習と経験学習理論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ボランティア学習研究	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡弘之	4. 巻 21
2. 論文標題 小川正子の晩景 近代日本のハンセン病隔離政策と臨床医	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 市大日本史	6. 最初と最後の頁 54-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡弘之	4. 巻 13
2. 論文標題 救らい思想とは何だったのか ハンセン病問題にどう関わるべきか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ハンセン病市民学会年報2017	6. 最初と最後の頁 152-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 668
2. 論文標題 書評 猪飼隆明著『近代日本におけるハンセン病政策の成立と病者たち』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 63-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村文哉	4. 巻 29
2. 論文標題 書評 有園真代著『ハンセン病療養所を生きる』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 95-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒井裕樹	4. 巻 161
2. 論文標題 日本文学に描かれた障害者像 「がんばる健気な障害者」はどこから来たのか？	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊 福祉労働	6. 最初と最後の頁 22-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 128(1)
2. 論文標題 書評 中村江里著『戦争とトラウマ 不可視化された日本兵の戦争神経症』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TANAKA, Kathryn M.	4. 巻 92
2. 論文標題 VIEWPOINT:Erasing Boundaries and A New Approach	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 WHO Goodwill Ambassador's Newsletter for the Elimination of Leprosy	6. 最初と最後の頁 2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大田容子、井上清美、室若葉	4. 巻 3
2. 論文標題 看護基礎教育用の教科書におけるハンセン病に関する記述内容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 姫路獨協大学看護学部紀要	6. 最初と最後の頁 17-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 10
2. 論文標題 「和解」の時代の日本近代ハンセン病研究 「顕彰」と「検証」を超えて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 同時代史研究	6. 最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 86(2)
2. 論文標題 日本における医療アーカイブズの現状と課題 ハンセン病資料を念頭に置いて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本ハンセン病学会雑誌	6. 最初と最後の頁 135-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 HIROKAWA, Waka	4. 巻 27(2)
2. 論文標題 When Medicine Participates in Field Studies: Epidemiological Research of Hansen's Disease during Pre- and Wartime Japan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Historia Scientiarum	6. 最初と最後の頁 218-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒井裕樹	4. 巻 45(8)
2. 論文標題 憲法の断層 障害者運動と日本国憲法についての研究ノート	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 136-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒井裕樹	4. 巻 51(10)
2. 論文標題 想像力と創造力 「自己表現」が生まれるとき	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 作業療法ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1030-1034
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 952
2. 論文標題 医療アーカイブズ試論：研究倫理・医療情報・スティグマの観点から	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 13-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣川和花	4. 巻 85(2)
2. 論文標題 湯之沢部落のハンセン病者と地域社会	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本ハンセン病学会雑誌	6. 最初と最後の頁 75-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TANAKA, Kathryn M.	4. 巻 36
2. 論文標題 Writing Ties in Japan: Family, Familialism, and Children's Writing in an early Twentieth Century Hansen's Disease Hospital	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Japanese Studies	6. 最初と最後の頁 231-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 松岡弘之	4. 巻 947
2. 論文標題 光明園から 邑久光明園へ：戦時ハンセン病療養所における自治会返上のあと・さき	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 1-11、66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石居人也	4. 巻 854
2. 論文標題 近代日本のハンセン病と「絶対隔離」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 56-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤健太	4. 巻 2016(8)
2. 論文標題 失明という経験：吉成稔「杖」を読む	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ノーマライゼーション	6. 最初と最後の頁 36-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤健太	4. 巻 2016(10)
2. 論文標題 ハンセン病問題の啓発を模索する	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ノーマライゼーション	6. 最初と最後の頁 38-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤健太・谷岡美穂・小鹿美佐雄・西村峰龍 / 坂田勝彦	4. 巻 10
2. 論文標題 ハンセン病文学と読書会の可能性	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 ハンセン病市民学会年報 2014	6. 最初と最後の頁 134-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中キャサリン	4. 巻 16
2. 論文標題 怪奇小説におけるハンセン病の肖像 幸田露伴の「對髑髏」を中心に	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 大手前大学論集	6. 最初と最後の頁 89-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計39件 (うち招待講演 16件 / うち国際学会 9件)

1. 発表者名 坂田勝彦
2. 発表標題 国立ハンセン病療養所の戦後史 多磨全生園の入所者の経験と実践から (テーマセッション「施設の戦後史」)
3. 学会等名 日本福祉社会学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村文哉
2. 発表標題 癩豫防関連地方制度下の沖縄社会におけるハンセン病患者とシマ社会 愛楽園開園以前のハンセン病罹患者たちの現実と青木恵哉
3. 学会等名 第77回西日本社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 TANAKA, Kathryn M.
2. 発表標題 Hansen's Disease and Patient Writing in Colonial Taiwan's Sanatorium, 1934-1944
3. 学会等名 AAS in Asia
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 TANAKA, Kathryn M.
2. 発表標題 Hojo Tamio's Children's Stories in the 1930s and Today
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西尾雄志
2. 発表標題 シチズンシップ教育の語られ方、語り方
3. 学会等名 シチズンシップ研究教育大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田富秋
2. 発表標題 宮古南静園退所者のライフストーリーから「宮古方式」の意義を問い直す
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 明治時代の医師と患者 塩谷の医家文書から
3. 学会等名 氏家喜連川歴史文化研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 コメント：医療の近代化 と施療・救済の観点から
3. 学会等名 大阪歴史科学協議会2019年度大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 日本のハンセン病アーカイブズとその研究利用の可能性
3. 学会等名 第22回日本精神医学史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田富秋
2. 発表標題 沖縄のハンセン病政策における「宮古方式」の意味 知念正勝氏の転勤問題から考える
3. 学会等名 第76回西日本社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田富秋
2. 発表標題 沖縄におけるハンセン病政策の矛盾と現実
3. 学会等名 第34回日本解放社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村文哉
2. 発表標題 癩予防関連地方制度と沖縄社会 国頭愛楽園開園以前のハンセン病罹患者たちの現実と青木恵哉
3. 学会等名 第34回日本解放社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西尾雄志、茂木健太郎、及川未希生
2. 発表標題 ボランティア学習シンポジウム3.0
3. 学会等名 第21回日本ボランティア学習学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西尾雄志、磯田浩司、興相寛
2. 発表標題 ワークキャンプに秘められた学びの構造
3. 学会等名 ボランティア学習東京フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 TANAKA, Kathryn M.
2. 発表標題 The Politics of Literature: Early Example of Patient Writing from Hansen's Disease Hospitals in Japan
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan 2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 TANAKA, Kathryn M.
2. 発表標題 Confessing Leprosy: Patient Writing, Relief Work, and Representing the Illness Experience
3. 学会等名 Leprosy and the ' Leper ' Reconsidered:An Interdisciplinary Conference
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 荒井裕樹
2. 発表標題 ハンセン病の歴史から考える表現と社会の関係 障害者アートの可能性に寄せて
3. 学会等名 「アートとソーシャルデザイン」研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石居人也
2. 発表標題 東京西郊地域の近代 19～20世紀転換期都市の空間編成と医療・衛生施設の郊外化
3. 学会等名 日韓歴史協同シンポジウム2018（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石居人也
2. 発表標題 攻囲される子どものからだ 帝国日本の「衛生」問題 へのコメント
3. 学会等名 第37回日本教育史研究会サマーセミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石居人也
2. 発表標題 明治を生きた人びとの生・病・死 歴史学者がみる明治の光と影
3. 学会等名 洋楽文化史研究会第97回例会シンポジウム「『明治150年』と音楽文化 精神の変容と西洋音楽（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西村峰龍
2. 発表標題 ハンセン病文学と沖縄
3. 学会等名 不穏な身体、疎外された文学 韓国と日本の身体疎外叙事の系譜 共同研究チームが主催する1年次国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 日本における医療アーカイブズの現状と課題 ハンセン病資料を念頭に置いて
3. 学会等名 第90回日本ハンセン病学会総会・学術大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 廣川和花
2. 発表標題 医療記録を通してみる近代日本の地域社会 明治中後期の栃木県塩谷郡喜連川町を事例に
3. 学会等名 立教大学史学大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 HIROKAWA, Waka
2. 発表標題 Modernizing Doctors, Practice, and Community Medicine: Through the Lens of General Practitioners in the Meiji Period
3. 学会等名 The Meiji Restoration and Its Afterlives: Social Change and the Politics of Commemoration（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松岡弘之
2. 発表標題 小川正子の晩景 近代日本のハンセン病隔離政策と臨床医
3. 学会等名 第20回市大日本史学会大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松岡弘之
2. 発表標題 「救らい思想」という問い
3. 学会等名 第13回ハンセン病市民学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高野弘之
2. 発表標題 ハンセン病関係資料の公文書としての活用可能性
3. 学会等名 第90回日本ハンセン病学会総会・学術大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村文哉
2. 発表標題 奄美ハンセン病罹患者の鹿児島収容 戦前期奄美のハンセン病問題と星塚敬愛園
3. 学会等名 第75回西日本社会学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山田富秋
2. 発表標題 ハンセン病回復者の社会復帰の困難 宮古南静園を中心に
3. 学会等名 第28回南島研セミナー（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西尾雄志
2. 発表標題 フィールドプログラム策定における振り返りのありかた 経験学習理論を参照して
3. 学会等名 日本ボランティア学習学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 HIROKAWA, Waka
2. 発表標題 The Struggle to Modernize Community Medicine in Nineteenth-Century Japan
3. 学会等名 Association for Asian Studies 2017 Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 HIROKAWA, Waka
2. 発表標題 The Introduction of Epidemiological Survey Methods for the Study of Hansen's Disease in Japan in the 1930s
3. 学会等名 International Health Organizations (IHOs): People, Politics and Practice in Historical Perspective (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 TANAKA, Kathryn M.
2. 発表標題 Conception in the Hospital: Births, Deaths, and Changing Families in Hojo Tamio's Fiction
3. 学会等名 The Twentieth Asian Studies Conference Japan (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 TANAKA, Kathryn
2. 発表標題 Writing Life: Illness, Isolation, and the Importance of Hojo Tamio's Fiction
3. 学会等名 19th International Leprosy Congress (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 TANAKA, Kathryn M.
2. 発表標題 Heroic Women, Tragic Fates: Representing Women and Hansen 's Disease in the 1930s
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 西尾雄志
2. 発表標題 親密性から誘発される公共性 『名づけの力』の観点から
3. 学会等名 第62回東北社会学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 西尾雄志
2. 発表標題 「ボランティアの振り返り」の授業実践 - 「公と私の円環」の観点とライティングスキル
3. 学会等名 第18回日本ボランティア学習協会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 中村文哉
2. 発表標題 『沖縄MTL』と同時代沖縄のハンセン病問題
3. 学会等名 第88回日本社会学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 NAKAMURA, Bunya
2. 発表標題 Lepers and Leprosariums in Japan: A Comparative Study of Leprosy-problems in mainland Japan and Okinawa Islands
3. 学会等名 Transnational Activism and Social Innovation in East Asia :Social Movement beyond Border (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 松岡弘之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 416
3. 書名 ハンセン病療養所と自治の歴史	

1. 著者名 荒井裕樹	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 障害者差別を問いなおす	

1. 著者名 荒井裕樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 現代書館	5. 総ページ数 200
3. 書名 どうして、もっと怒らないの？ 生きづらい「いま」を生き延びる術は障害者運動が教えてくれる	

1. 著者名 加藤泰史・小島毅（編集）、石居人也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 456
3. 書名 尊厳と社会（下）	

1. 著者名 長嶋俊介（編集）、青木さぎ里、赤松達也、麻生直子、阿比留勝利、蘭由岐子、安溪貴子、安溪遊地、池田哲夫ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 480
3. 書名 日本ネシア論	

1. 著者名 石居人也	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 344
3. 書名 歴史を学ぶ人々のために：現在をどう生きるか	

1. 著者名 Hirokawa, Waka, Kathryn Tanaka, David G. Wittner, Philip C. Brown et al.	4. 発行年 2016年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 280
3. 書名 Science, Tecnology, and Medicine in the Modern Japanese Empire	

1. 著者名 蘭由岐子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 生活書院	5. 総ページ数 537
3. 書名 「病いの経験」を聞き取る：ハンセン病者のライフストーリー[新版]	

1. 著者名 荒井裕樹	4. 発行年 2017年
2. 出版社 現代書館	5. 総ページ数 300
3. 書名 差別されてる自覚はあるか：横田弘と「青い芝の会」行動綱領	

1. 著者名 ハンセン病フォーラム（編集）、佐藤健太、蘭由岐子、廣川和花、谷岡聖史、武田徹ほか	4. 発行年 2016年
2. 出版社 工作舎	5. 総ページ数 376
3. 書名 ハンセン病 日本と世界（病い・差別・いきる）	

1. 著者名 荒武賢一朗、野本 禎司、兼平 賢治、宮田 直樹、加藤 諭、三ツ松 誠、佐藤和賀子、松岡 弘之	4. 発行年 2016年
2. 出版社 岩田書院	5. 総ページ数 301
3. 書名 東北からみえる近世・近現代 ささまざまな視点から豊かな歴史像へ	

1. 著者名 David G. Wittner, Philip.C. Broun, Aleksandra Kobiljski, Julia Yongue, Yoshiyuki Kikuchi, William Johnston, Sumiko Otsubo, Janice Matsumura, Waka Hirokawa, Kathryn Tanaka, Roberto Padilla, Norihito Mizuno, Ito Kenji, Tomoko Steen, Aya Homei, James R. Bartholomew	4. 発行年 2015年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 302
3. 書名 Science, Technology, and Medicine in the Modern Japanese Empire	

1. 著者名 阿部安成・石居人也監修・解説、青木恵哉著、渡辺信夫編	4. 発行年 2015年
2. 出版社 近現代資料刊行会	5. 総ページ数 650
3. 書名 選ばれた島	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山田 富秋 (YAMADA Tomiaki) (30166722)	松山大学・人文学部・教授 (36301)	
研究分担者	坂田 勝彦 (SAKATA Katsuhiko) (60582012)	東日本国際大学・健康福祉学部・准教授 (31604)	
研究分担者	中村 文哉 (NAKAMURA Bunya) (90305798)	山口県立大学・社会福祉学部・教授 (25502)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	廣川 和花 (HIROKAWA Waka) (10513096)	専修大学・文学部・准教授 (32634)	
研究分担者	田中 キャサリン (TANAKA Kathryn) (50740049)	大手前大学・総合文化学部・講師 (34503)	
研究分担者	西尾 雄志 (NISHIO Takeshi) (30434335)	近畿大学・総合社会学部・准教授 (34419)	
研究分担者	石居 人也 (ISHII Hitonari) (20635776)	一橋大学・大学院社会学研究科・教授 (12613)	
研究分担者	荒井 裕樹 (ARAI Yuki) (90749847)	二松學舎大学・文学部・講師 (32664)	
研究分担者	井上 清美 (INOUE Kiyomi) (20511934)	姫路獨協大学・看護学部・教授 (34521)	
研究協力者	松岡 弘之 (MATSUOKA Hiroyuki)		
研究協力者	高野 弘之 (TAKANO Hiroyuki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	西村 峰龍 (NISHIMURA Minetatsu)		
研究協力者	佐藤 健太 (SATO Kenta)		